文部省著作

小學日本歷史一

發賣所 合名會社國定教科書共同販賣所

42937
教科書文庫
4
210
32-1905
25000
32288

文部省著作

小學日本歷史一

廣島大學東雲分校圖書之印

發賣所 合名會社國定教科書共同販賣所

文部省
登録番号 32288
分類 375.9 M

目録

第一　天照大神……一
第二　神武天皇……三
第三　日本武尊……五
第四　神功皇后……八
第五　仁德天皇……十一
第六　物部氏と蘇我氏……十三
第七　聖德太子……十六
第八　天智天皇と藤原鎌足……十九
第九　聖武天皇……二十四
第十　和氣清麻呂……二十七
第十一　桓武天皇と坂上田村麻呂……二十九
第十二　傳教大師と弘法大師……三十二
第十三　菅原道眞……三十五
第十四　朝臣の榮華と武士のおこり……三十九
第十五　源義家……四十四
第十六　平清盛……四十八
第十七　源頼朝……五十四
第十八　承久の乱……五十九
第十九　元寇……六十三
第二十　北條氏亡ぶ……六十五

小學日本歴史　一

天皇陛下の御先祖

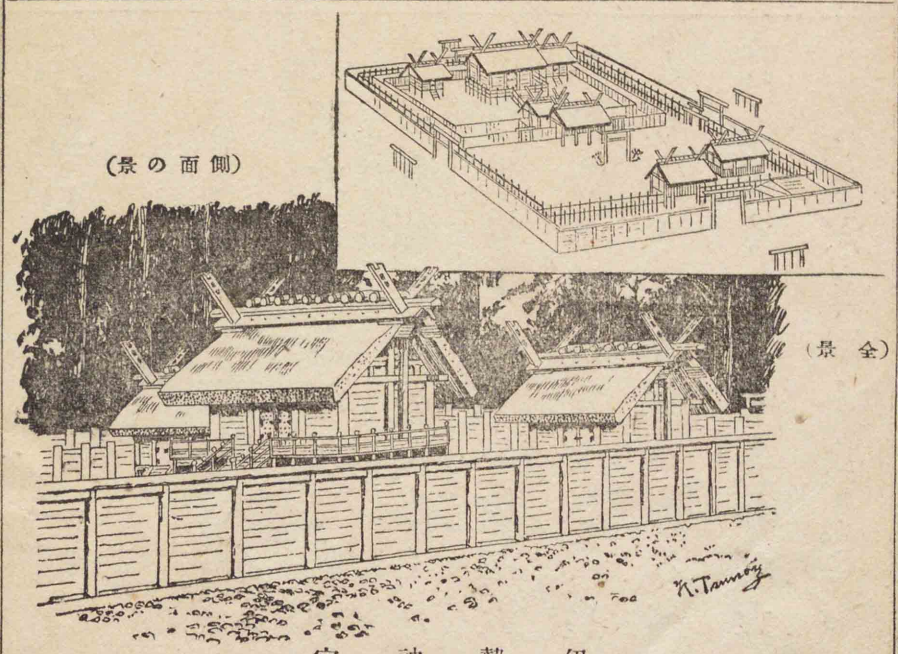
瓊瓊杵尊

帝國の基

第一　天照大神（アマテラスオホミカミ）

天照大神はわが天皇陛下の御先祖（ごせんぞ）にてましします。その御德（おんとく）、きはめて、高く、あたかも、太陽（たいよう）の天上にありて、世界を照（てら）すが如し。大神は、御孫瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）に、この國をさづけたまひて、「皇位（こうい）の盛なること、天地とともにきはまりなかるべし。」と仰（おほ）せたまひき。萬世にうごくことなき、わが大日本帝國の基（もとゐ）は、實（じつ）に、ここに、さだまれるなり。この時、大神は、鏡（かがみ）と劒（つるぎ）と玉（たま）と

三種の神器



伊勢神宮

の三つの御寶を、尊にさづけたまひき。これを三種の神器といふ。

その中にも、御鏡は、大神の御德をあらはしたてまつれるものにして、ことに、たふとし。

されば、大神は、「この鏡を見ること、なほ、われを見るが如くせよ。」と

瓊瓊杵尊日向にくだりたまふ

天皇日向を出でたまふ

仰せたまへり。伊勢の神宮はこの御鏡を祭りたてまつれるなり。

かくて、瓊瓊杵尊は、三種の神器をいただきて、日向の國にくだりたまへり。瓊瓊杵尊より四代目の御方を神武天皇と申す。

第二　神武天皇

神武天皇の日向にましましころは、東の方の國は、なほ、いまだ、開けず、きはめて、さわがしかりき。されば、天皇は、これを平げて、天下を安くせんとお

大和地方平ぐ

ぼしめし、御兄弟、皇子たちとともに、日向を出でたまひて、數年の間、御辛苦の末、つひに、大和地方を平げたまへり。

天皇即位に即きたまふ

かくて、天皇は、畝傍山のほとりに、橿原の宮をつくりたまひて、はじめて、天皇の御位に即きたまへり。

紀元元年

この年は、今より二千五百六十餘年のむかしにして、これを、わが國の紀元元年となす。毎年二月十一日は、このめでたき日にあたれるがゆゑに、國民、ひとしく、これを祝ふ。これを紀元節といふ。

紀元節

第三　日本武尊

崇神天皇

神武天皇より數代の間は、別に、大いなるさわぎもなかりき。されど、遠き國國には、いまだ、天皇に從ひたてまつらざるものもありければ、崇神天皇の御代に、はじめて、四方へ

四道將軍

將軍をつかはして、これを討たしめたまひき。

景行天皇

かくて、天下はおだやかになりしが、景行天皇の御代となりて、

熊襲そむく

筑紫の熊襲そむけり。筑紫は今の九州のことにて、熊襲は、その南の方に、ゐたるものどもなり。

天皇熊襲を討ちたまふ

天皇、ひとたびは、みづから、これをしづめたま

尊熊襲を討ちたまふ

ひしが、後に、また、そむきしかば、このたびは、御子日本武尊をつかはしたまへり。尊は、この時、御年、なほ、わかかりしが、ただちに、筑紫にいたり、熊襲のかしら川上梟帥を殺したまひき。

蝦夷そむく

その後、東の國の蝦夷そむきたれば、尊は、また、天皇の命をうけて、これをも討ちたまへり。その御途中に、駿河の國にいたりたまひしとき、賊ども、尊をあざむき、野にいざなひて、燒き殺したてまつらんとせり。尊、すなはち、叢雲劍をぬきて、草を薙ぎはらひ、かへって、賊を亡したまへり。これより、この劍を草薙

尊蝦夷を討ちたまふ

草薙劍

劍といふ。この劍は、三種の神器の一にして、さきに、伊勢の神宮を拜したまひし時、御叔母よりうけたまひしなり。かくて、尊は、ますます、進みたまひしに、

蝦夷平ぐ

蝦夷、みな、おそれて降參し、東の國、ことごとく、平ぎたり。

尊かくれたまふ

かく、尊の御はたらきによりて、東も西も、みな、平ぎしが、尊は、蝦夷征伐の御歸路に、近江の賊を討ちたまひて、病にかかり、つひに、伊勢にてかくれたまへり。

仲哀天皇

熊襲を討ちたまふ

三韓

任那

皇后新羅を從へんとしたまふ

第四　神功皇后

日本武尊の御子の、御位に卽きたまひしを、仲哀天皇と申し、天皇の皇后を神功皇后と申す。この御代に、熊襲、また、そむきしかば、天皇は皇后とともに、これを討ちたまへり。

このころ、今の韓國の地には、新羅、百濟、高麗の三國ありき。これを、わが國にて、三韓といへり。また、早くより、わが國に從ひし任那といふ小國もありき。

皇后は賢き御方にてましましかば、まづ、新羅を從へなば、熊襲は、おのづから、平がんとおぼしめし

天皇かくれたまふ

皇后新羅を討ちたまふ

新羅王降參す

百濟高麗從ふ

三韓貢物を奉る

百濟より王仁書物を持ち來る

き。たまたま、天皇、軍なかばに、かくれたまひき。ここにおいて、皇后は、人をして熊襲を平げしめ、さらに、武内宿禰とはかり、海を渡りて、新羅にいたりたまひしに、新羅王、大いに、おそれて、たちまち、降參せり。

それより、百濟も、高麗も、みな、わが國に從へり。

三韓わが國に從ひし後は、かの國より、いろいろのめづらしき貢物をたてまつり、また、學者、職人なども渡り來れり。これより、わが國は、ますます、開くるにいたれり。

仲哀天皇の御子應神天皇の御代に、王仁といふ學

稚郎子王仁について學ぶ

支那より阿知使主來る

いろいろの職人來る

者、百濟より、はじめて、書物を持ち來り、皇子稚郎子、これについて學びたまひき。これより、わが國に學問開けたり。ついで、阿知使主といふもの、多くの人人をともなひて、支那より來れり。この人、また、學問をもって朝廷に仕へたり。これより後、王仁と阿知使主との子孫は、代代、朝廷の記錄をつかさどることとなれり。また、裁縫、機織の職人なども、おひおひ、三韓、または、支那より來りて、いろいろの手業も進みたり。

仁德天皇

稚郎子御位を御兄にゆづりたまふ

天皇の御めぐみ

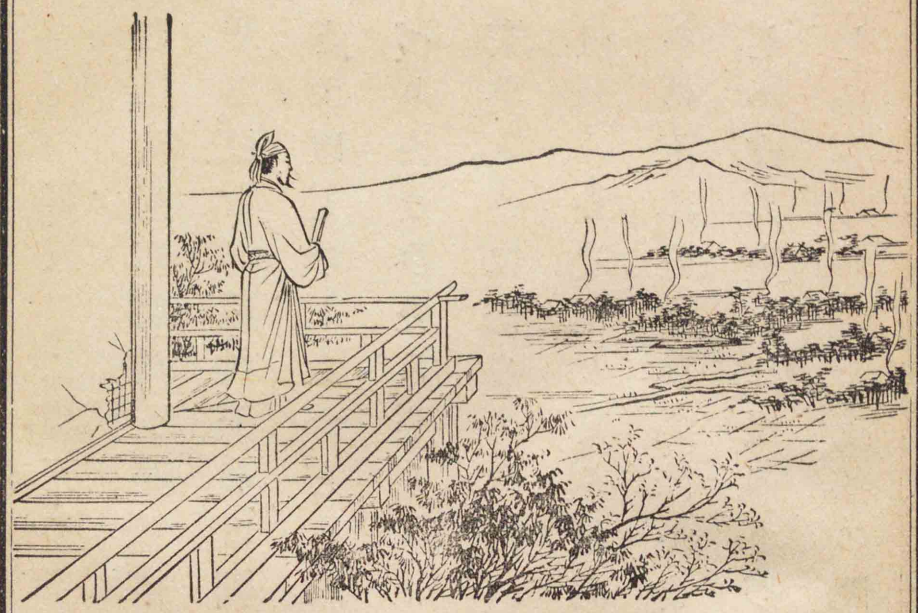
天皇民の貢をゆるしたまふ

第五　仁德天皇

仁德天皇は、應神天皇の御子にして、稚郎子の御兄なり。はじめ、應神天皇は御位を稚郎子につたへんとおぼしめししかども、稚郎子は、これを御兄にゆづりたまひたるなり。

天皇、大いに、御心を政治にとどめ、ふかく、人民をあはれみたまへり。ある日、高きところに上りて、四方をのぞみたまひしに、かまどの煙立つこと少かりしかば、天皇、これ、民のまづしきゆゑならんと、おぼしめし、これより、三年の間、民の貢をゆるしたまひ

天皇けんやくをつとめたまふ



仁德天皇民のかまどの煙をのぞみたまふ

き。また、大いに、けんやくをつとめたまひて、御殿のやぶれたるをも、つくろはせたまはざりき。この間、豊年うちつづきて、民、みな、富みさかえしが、なほ、三年たちて、はじめて、御殿をつくることをゆるしたまへり。されば、

天皇農業をすすめたまふ

人人、よろこび、いさみて、日夜工事をはげみ、御殿は、まもなく、できあがりたり。

また、天皇は、堤をきづかせ、池をほらせなどして、農業をすすめたまひしかば、人人、みな、その業をたのしみて、天下、平かに、をさまれり。

第六　物部氏と蘇我氏

道臣命

饒速日命

神武天皇の大和御平定の時、軍功多かりし大將に、道臣命といふ人ありき。また、この時、あらたに、天皇に從ひたてまつりし大將に、饒速日命といふ人あ

大伴氏
物部氏

りき。道臣命の子孫を大伴氏といひ、饒速日命の子孫を物部氏といふ。この二氏は、つねに、朝廷に仕へて、おもき役人となりき。ことに、仁徳天皇の御孫雄略天皇の御代より後は、大伴、物部二氏より出づる

大連
大臣

二人の大連と、武内宿禰の子孫より出づる大臣との三人、あひならびて、政治をたすくることとなれり。

雄略天皇

雄略天皇は、御生れつき勇ましく、狩場に猪をふみ殺したまひしほどの、御方なりしかども、また、ふかく、御心を政治にとどめたまひき。されば、支那より

天皇工業をすすめたまふ

織物などの職人をまねき、また、蚕をかふことをすすめたまひて、いろいろの工業は、このころより、大いに、進みたり。

蘇我氏

その後、大伴氏、やや、衰へて、物部の大連は、武内宿禰の子孫なる蘇我の大臣とともに、もっぱら、政治にあづかりき。たまたま、今より千三百五十年ほど前、欽明天皇の御代に、百済より佛教をつたへたり。この時、大臣蘇我稲目は、「これを祭るべし。」といひ、大連物部尾輿は、「祭るべからず。」といひて、たがひに、意見を異にし、これより、二氏あひ争ふにいたれり。

百済より佛教をつたふ
物部蘇我両氏の争

蘇我馬子と物部守屋

物部氏亡ぶ

ついで、敏達、用明二天皇の御代にいたりても、稻目の子馬子、尾輿の子守屋は、おのおの、父の志をつぎて、はげしく、爭ひき。かくて、馬子は、つひに、守屋をせめ殺して、物部氏を亡し、これより、蘇我氏、ひとり、盛になれり。

第七　聖德太子

聖德太子

聖德太子は用明天皇の御子なり。幼時より才智すぐれたまひしが、長ずるに從ひて、學問も、大いに、進み、推古天皇の御代に、皇太子となりて、すべての政

太子新しき政治をなしたまふ

太子佛敎をひろむることにつとめたまふ

治をとり行ひたまへり。

聖德太子

太子は、いろいろ、新しき政治をなして、大いに、わが國の利益をおこしたまへり。また、佛敎を信じて、大臣蘇我馬子とともに、これをひろむることに、つとめたまひ、多く

天王寺
法隆寺

の寺をたて、佛像をもつくりたまへり。その中にも、攝津の天王寺、大和の法隆寺などは、わけて、名高きものなり。これより、佛教は、ますます、盛になれり。

太子憲法を定めたまふ

太子は、また、十七條の憲法を定め、上下のよるべきところを示したまひき。明治三十六年は、この時より、一千三百年目にあたれり。

太子使を支那につかはしたまふ

ついで、太子は、はじめて、使を支那につかはし、留學生をもおくりたまへり。これより、支那とのまじはり、しげくなりて、學問、そのほか、いろいろの手業も、多く、わが國につたはりたり。

太子うせたまふ

かく、太子は、力を政治につくしたまひしが、いまだ、御位に即きたまはざる前に、うせたまへり。この時、天下の民は、親を失へるが如く、みな、なげきかなしみたりといふ。

第八　天智天皇と藤原鎌足

蘇我氏のわがまま

蘇我氏、ひとり、朝廷の政治を助くることとなりしより後は、そのわがままなること、きはめて、はなはだしかりき。ついで、舒明天皇を經て、皇極天皇の御代には、馬子の孫入鹿、つひに、聖德太子の子孫を亡

皇極天皇

蘇我入鹿

中臣鎌足

し、天皇をもはばからざる行あるにいたれり。中臣鎌足、大いに、これをいきどほり、いかにもして、蘇我氏を亡さんとはかりき。この時、中大兄皇子といふ賢明なる御方ありき。御母は皇極天皇なり。皇子、また、ふかく、蘇我氏のわがままなるを、いきどほりたまひしかば、鎌足、ひそかに、皇子とはかりて、よきをりをまちゐたり。たまたま、三韓より貢物をさしあぐることありき。鎌足は、このをりこそとて、あらかじめ、皇子とはかりごとを定め、つひに、殿上にて入鹿を殺したり。ついで、入鹿の父蝦夷も、また、殺され

中大兄皇子

鎌足皇子とはかりて蘇我氏を亡さんとす

入鹿殺さる

蘇我氏亡ぶ

て、わがままをきはめたる蘇我氏は、つひに、亡びたり。かくて、皇極天皇は御位を孝徳天皇にゆづりたまひ、中大兄皇子は皇太子となりたまへり。

大化の改新

皇太子は、鎌足とはかり、天皇を助けて、大いに、政治を改めたまへり。これを大化の改新といふ。大化とは、この時、はじめて、定められたる年號にして、今より、およそ、千二百六十年前なり。

年號

天下の土地人民を朝廷にをさむ

大化の改新によりて、これまで、勢力あるものが、私有して、ほしいままに、つかひたりし土地、人民は、みな、一様に、天皇の土地、天皇の人民となれり。この時、

皇太子は、「天に二つの日なく、國に二人の君なし、ゆゑに、天下をたもち、人民をつかふべきは、ただ、天皇あるのみ。」と仰せたまひて、まづ、御自分の土地、人民を、ことごとく、天皇にたてまつりたまへり。

皇太子が政治をとりたまへる間に、三韓、わが國よりはなれ、蝦夷、大いに、服したり。これよりさき、三韓には、たびたび、騒ありて、朝廷より兵をさしむけたまひしことも、少からざりき。しかるに、この時にいたりて、新羅は、支那の唐國の助をかりて、百濟などを亡し、つひに、わが國よりはなれたるなり。また、蝦

新羅百濟などを亡す

夷は、日本武尊御征伐の後にも、しばしば、乱れたりしが、この時にいたり、阿倍比羅夫をつかはし、討ちて、これを從へしめたまへり。これより、大いに、地を東北の方に、ひらくにいたれり。

阿倍比羅夫蝦夷を平ぐ

藤原鎌足

天智天皇

皇太子、御位に即きたまひて、天智天皇と申す。天皇は、鎌足をして、政治のしかたより、國民の心得となるべき、種種の新

大寶律令

藤原氏

しき規則を定めしめたまへり。この規則は、つぎつぎの御代に、たびたび、改正せられて、文武天皇の大寶二年に發布せられたり。これを大寶律令といふ。この律令は、これより後、ながく、政治の本となれり。」鎌足は、かく、つねに、功多かりしかば、その死する前に、大織冠といふ、もっとも、高き位をさづかり、また、藤原といふ氏を與へられたり。後の世に盛になれる藤原氏は、實に、これよりはじまれり。

第九　聖武天皇

元明天皇

都を奈良にうつしたまふ

奈良の朝

聖武天皇

文武天皇かくれたまひし後、その御母、御位に即きたまへり。これを元明天皇と申す。天皇の御代に、都を奈良にうつしたまへり。このころには、唐國との交通しげくなりて、世の中、ますます、開け、はじめて、歴史、地理などの書物もできたり。都も、これまでは、たいてい、御代ごとに、かはるならひにて、粗末なりしが、この都は、唐の風にならひて、りっぱなるものとなり、これより、七代七十餘年の間、代代、ここにましましき。この間を奈良の朝といふ。

奈良の朝は、聖武天皇の御代にいたりて、もっとも、盛

國分寺
東大寺の大佛

になれり。天皇は文武天皇の御子なり。天皇、あつく、佛教を信じ、國ごとに國分寺をたて、また、奈良に東大寺をたてて、高さ五丈あまりの大佛をつくりたまへり。

光明皇后
皇后の慈善事業
藤原不比等

天皇の皇后を光明皇后と申す。皇后、また、大いに、佛教を信じ、ふかく、民をあはれみ、多くの慈善事業をおこしたまへり。皇后は、藤原鎌足の孫にして、不比等の女なり。これより後、代代の皇后は、多く、藤原氏より出づることとなれり。

佛教にともなへる世の中のすすみ

かく、佛教の盛になれるとともに、學問、そのほか、種種の技術も、進みたり。また、僧の中には、山を開き、道をつくり、橋をかけなどするものもありて、人民の便利もましたり。されど、行よからぬ僧も、また、出で來れり。

道鏡

第十　和氣清麻呂

聖武天皇の皇女稱徳天皇の御代に、道鏡といふ僧ありき。おもく、朝廷に用ひられて、わがままなる行多く、つひに、法王の位をさへさづかりき。この時、宇佐八幡の教といつはりて、「道鏡、天皇の御位に即か

和氣清麻呂

清麻呂神の教を申しあぐ

ば、天下太平ならん。」と申しあぐるものありき。天皇、すなはち、和氣清麻呂をつかはして、さらに、神の教を受けしめたまへり。しかるに、清麻呂は、心正しき人なりければ、宇佐よりかへりて、「わが國には、君と臣との別、むかしより、さだまれり。臣下の身にて、天皇の御位をのぞむが如きものは、早く、のぞくべし。」と、はばかるところなく、申しあげたり。されば、清麻呂は道鏡の怒にあひて、大隅の國に流されしかども、道鏡の志は、これがために、とげざりき。ほどなく、光仁天皇御位に卽きたまひて、道鏡は下野の國に

道鏡の志やぶる

うつされ、清麻呂は召しかへされたり。

桓武天皇

都を京都にうつしたまふ

第十一　桓武天皇と坂上田村麻呂

光仁天皇のつぎに、御位に卽きたまひしを、桓武天皇と申す。天皇は、延曆十三年に、都を今の京都の地にうつしたまへり。平安京これなり。これより、明治のはじめまで、一千七十餘年の間は、代代の天皇、ここに、ましましたりき。

平安京の制

この平安京は、奈良の都の制をひろめて、いとなまれたるものにして、その形、ほぼ、方形をなせり。その

中央に、南北に通ずる大道あり、朱雀大路といふ。その北の端に皇居あり。この大路にて、左京右京をわかち、さらに、縦横に碁盤の目の如く、あまたの道路を開けり。その右京は、早く、すたれて、今の京都市の中には、左京のみのこれり。去る明

桓武天皇

治二十六年は、天皇の、ここに、うつりたまひてより、一千百年目にあ

平安神宮
大極殿
坂上田村麻呂
蝦夷しばしばそむく
蝦夷平ぐ

たりしかば、二十八年に、市民は紀念祭を行ひ、また、平安神宮をたてて、天皇を祭りき。この神宮は、むかしの平安京の大極殿の形をうつして、つくれるものなれば、これを見て、むかしの皇居の有様を、おしはかることを得るなり。

天皇は、また、坂上田村麻呂をして、蝦夷を討たしめたまへり。蝦夷は、阿倍比羅夫が征伐せし後にも、なほ、しばしば、そむきしかば、天皇は、これを平げんと、おぼしめし、田村麻呂をつかはしたまひしなり。これより、東北の地方、はじめて、しづかになれり。田村

麻呂は、かく、武勇すぐれたる人なりしかば、後の世に、將軍の、征伐に出づることある時には、いつも、その墓に詣でたりといふ。

平安朝のはじめの頃

桓武天皇より後、數代、平安京の御代のはじめの頃は、朝廷の威光、もっとも、盛にして、天下、また、大いなる事變なかりき。

第十二　傳教大師と弘法大師

奈良の朝より、佛教盛になりて、行よからぬ僧も出でたれども、また、才學すぐれ、德高く、行正しきもの

最澄

延暦寺

最澄唐に留學す

天台宗

空海

空海唐に留學す

も、多く、出でたり。中にも、傳教大師、弘法大師の如きは、もっとも、あらはれたり。

傳教大師は近江の人なり。その名を最澄といふ。早く、延暦寺を比叡山にたてしが、桓武天皇の仰を受け、延暦二十三年、唐に入りて佛教を學び、翌年、歸りて、天台宗を、わが國に、つたへたり。これより、この宗わが國にひろまれり。後に、最澄は、朝廷より、傳教大師といふおくり名を賜はりたり。

最澄と同じ頃に、また、空海といふ名高き僧ありき。空海は、讃岐の人なり。最澄と同じ年に、唐に渡り、留

眞言宗

金剛峯寺

空海用水池の工事を助く

傳教大師

弘法大師

空海は、學問深く、文字にたくみなりき。また、故郷なる讃岐の國に、大いなる用水池の工事を助けて、なる

學すること三年の後、歸りて、わが國に眞言宗をひろめ、ことに、嵯峨天皇の御信任を得て、はじめて、高野山を開き、金剛峯寺をたてたり。

皇后多く藤原氏より出でたまふ

がく、百姓のうれへをのぞきたるなど、世の中の益をおこしたること、少からざりき。されば、上下のうやまひも厚く、後に、また、朝廷より弘法大師といふおくり名を賜はりたり。

これより、天台、眞言の二宗、ひろく、行はれて、佛教は、ますます、盛になれり。

第十三　菅原道眞

藤原氏は、その祖鎌足大功を立ててより、しだいに、盛になれり。ことに、光明皇后の後は、皇后、多く、この

藤原氏攝政となる

藤原基經

關白

氏より出でたまふこととなりて、その一門、いよいよ、朝廷に勢を得たり。かくて、つひには、幼少の天皇を御位に卽けたてまつりて、おのれ、攝政となるをつねとするにいたれり。中にも、藤原基經は、陽成天皇が御病氣にてましましを、御位よりおろし、光孝天皇をむかへ立てたてまつりき。かくて、おのれ、もっぱら、政治にたづさはり、宇多天皇の御代には、關白の詔をさへ賜はりき。されば、藤原氏に緣なき人人は、たとひ、皇族にても、その勢、大いに、おとることとなれり。かかるところへ、菅原道眞出でたり。

道眞は藤原氏に緣なし

宇多天皇道眞を重く用ひたまふ

藤原時平左大臣となり菅原道眞右大臣となる

道眞は、學者の家に出で、學問をもって身を立てたる人にして、もとより、藤原氏に緣なし。宇多天皇は、かねてより、藤原氏のほしいままなるをおさへんとおぼしめししかば、基經の死後には、道眞を重く用ひたまひ、これと、政治上のことをはかりたまへり。御子の醍醐天皇は、御めぐみ深き君にてましましが、また、御父の御心をつぎて、基經の子の時平と、この道眞とを、左右の大臣となして、政治にあづからしめたまへり。しかるに、道眞は、年もたけ、才學もすぐれ、上の御信用も、ことに、厚かりければ、家がら

道眞人人のねたみを受く

をほこれる時平は、つねに、これを心よからず思へり。そのほかの人人にも、道眞をねたむもの多かりき。かくて、道眞は、これらの人人のざんげんにより

道眞太宰權帥におとさる

て、太宰權帥におとされ、筑前にうつされたり。ここにおいて、宇多天皇の御志もむなしくなり、藤原氏は、ますます、勢を得ることとなれり。後に、道眞は、その罪なきこと、明になりて、朝廷より高き位を贈られ、また、

天滿天神

天滿天神として、世にうやまはるるにいたれり。明治三十五年は道眞の死後一千年目にあたれり。

第十四　朝臣の榮華と武士のおこり

地方の政治乱る

武士

藤原氏、ひとり、朝廷にさかえてより、朝臣、いづれも、榮華をきはめ、宴遊に日をおくりければ、地方の政治は、かへって、ゆるかせになれり、されば、朝廷に志を得ざる人人の、地方に下りて、武士となるもの多かりき。その中には、よからぬ行のものもありて、醍醐天皇の御子朱雀天皇の御代には、世の中、すこぶる、さわがしかりき。

平將門

この頃、平將門、藤原純友といふもの、同時に、東西に

藤原純友

朝臣の遊樂（一）

ありて、むほんしたり。將門は、もと、藤原時平の弟忠平に仕へたりしが、のぞみの官につくことを得ざりしかば、怒りて、東國に下り、下總によりて、つひに、數國をうばへり。また、純友は伊豫の國府の役人なりしが、つひに、海賊の大將となりて、あ

平貞盛
藤原秀郷

源經基

またの手下をひきゐ、盛に、中國、四國の地方を荒したり。されば、人人の驚、はなはだしく、朝廷より、將軍をつかはしてこれ等を征伐せしめたまひき。しかるに、將門は、その、いまだ、いたらざるうちに、平貞盛、藤原秀郷等のために殺され、純友も、また、まもなく、亡びたり。この時、源經基といふもの、

朝臣の遊樂（二）

武士世の中の乱を平ぐ

海賊を平げて、功多かりき。

この貞盛、秀郷、經基などは、いづれも名高き武士の大將なりき。世の中の乱も、これ等の人人の力によりて、やうやく、しづまりたれば、その家、しだいに、さかえたり。

藤原氏一門あひ爭ふ

また、藤原氏は、これ等の武士の助をかりて、ほしいままなる行も多く、つひには、一門の間に、たがひに、高き位を得んとて、あひ爭ふにいたれり。中にも、忠平の曾孫道長の如きは、もっとも、榮華をきはめたり。

藤原道長の榮華

道長は、一條天皇の御時より、多年の間、政治にあづかれり。かくて、その三人の女は、三代の后に立ち、その外孫にあたる御方は、三人まで、引きつづきて、御位に即きたまひき。後一條、後朱雀、後冷泉の三天皇これなり。されば、その家、ことに、さかえて、藤原氏の一門多き中にも、後の世に、攝政、關白の職につく家がらは、いづれも、道長の子孫より出づることとなれり。

攝政關白の家がら

後三條天皇

されど、藤原氏の勢の、もっとも、盛なりしは、道長とその子頼通との代にとどまり、後三條天皇出でて、みづから、政治を執りたまふにおよびては、その勢、や

白河天皇

や、衰へたり。つぎの白河天皇は、また、御父の御心をつぎたまひ、その御位を去り、髪を剃りて、法皇となりたまひし後も、なほ、院中にありて、政治を執りたまひき。これより院政といふことはじまり、藤原氏は、また、ふるはざるにいたれり。

院政

第十五　源義家

源頼信
平忠常

源經基の子孫には、武士の大將として、名高き人人多かりき。經基の孫頼信は、後一條天皇の御代に、平忠常が東國におこしし乱を平げて、大功を立てたり。頼信の子頼義は、その子義家とともに、陸奥の乱を平げて、また、高きほまれをあらはしたり。

源頼義
源義家

陸奥の乱

陸奥の地方は、さきに、坂上田村麻呂が蝦夷を討ちてより後、別に、大いなる事變はなかりしが、朝廷の政のゆるむに從ひて、つひに、大いに、乱れたり。この頃、陸奥といひたりしは、今の磐城、岩代より、北の地方の總稱なり。ここに、後冷泉天皇の御代に、安倍頼時といふもの、多くの土地を從へ、蝦夷人をひきゐてそむきたり。されば、朝廷は、頼義に仰せて、これを討たしめたまひ、頼義は、義家とともに、陸奥にいた

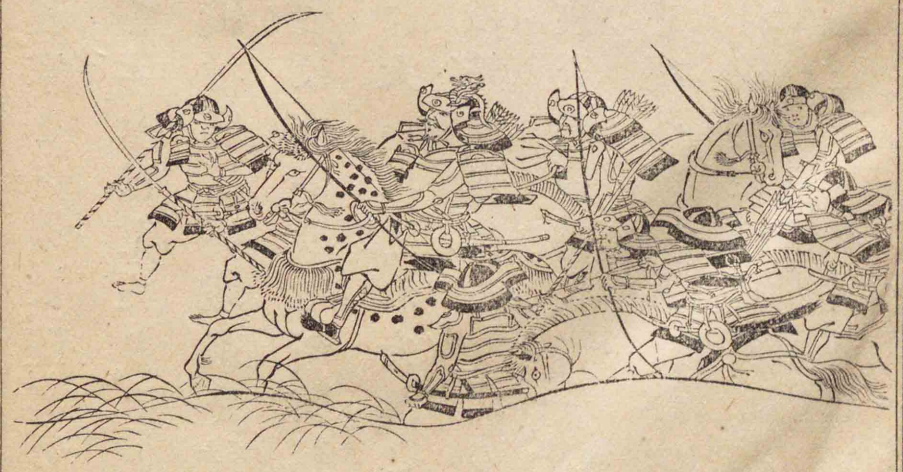
安倍頼時

りて、これと戰へり。しかるに、賴時死して後も、その子貞任（トー）、なほ、勢つよくして、容易に、從はざりしかば、賴義は、清原武則といふものとともに、力を合せて、これを討ち、九年の後に、やうやく、平ぐることを得たり。ゆゑに、この戰を、世に、前九年の役といふ。この戰に、義家は

安倍貞任

清原武則

前九年の役



後三年の役（義家飛雁を見る）

年なほ、若かりしかども、武勇すぐれ、父を助けて功多かりき。

武則も、また、この戰に功多く、その子孫は、安倍氏の舊領地を得て、勢盛なりしが、つひに、一族の間に、爭をおこして、奥羽の地乱れたり。これは、前九年の役より二十餘年の後にして、堀河天皇の御代なりき。この時、義家は陸奥守となりしかば、みづから、行きて、これを討ち、弟義光、藤原清衡とともに、三年の後に、やうやく、これを平げ

清原氏一族あひ爭ふ

義家雁を見て伏兵をさとる

たり。この戰に、義家は、乱れとぶ雁のさまを見て、野に伏兵あるをさとり、その難を免れたることあり

後三年の役

き。世に、これを後三年の役といふ。ここにおいて、東北の方しづまり、源氏の名、いよいよ、武士の間に高くなれり。

第十六　平清盛

平忠盛

平清盛

平貞盛の子孫に忠盛といふものありき。白河、鳥羽の兩上皇に仕へて、家をおこしし、その子清盛にいたりて、平氏の勢、大いに、盛になれり。

源爲義

源義朝

源爲朝

崇德上皇皇位をのぞみたまふ

この頃、源氏にも、また、義家の孫爲義、爲義の子義朝、爲朝などありて、平氏におとらず、世に聞えたり。しかるに、保元、平治の二度の乱に、清盛の功、ことに、多かりしかば、平氏、ひとり、世に榮ゆるにいたれり。

保元の乱とは、崇德上皇が皇位をのぞみたまひしよりおこりし乱なり。はじめ、崇德天皇は、御父鳥羽法皇の御心により、早く、御位を近衛天皇にゆづりて、上皇となりたまひき。しかるに、近衛天皇かくれたまひて、御子おはせざりしかば、法皇は、上皇の御弟後白河天皇を、立てたまへり。されば、上皇は御心

藤原頼長

爲義爲朝等上皇の召に從ふ

清盛義朝等天皇の召に從ふ

上皇方の軍やぶる

保元の乱

藤原信頼

安からず、つひに、左大臣藤原頼長とはかり、爲義、爲朝などを招きて、兵をあつめたまへり。この時、清盛は義朝とともに、天皇の召に從ひて、ただちに、上皇の御殿をせめしかば、上皇方の軍やぶれて、上皇は、讃岐にうつされたまひ、頼長は死し、爲義は子義朝のために斬られ、爲朝は流されたり。この時、保元元年なりしかば、これを保元の乱といふ。

清盛、義朝はこの功によりて、それぞれ、重き恩賞を受けしが、義朝は、清盛のみ勢の盛なるを見て、心よからず思へり。この頃、また、藤原信頼といふものあ

信頼義朝ともにむほんす

信頼義朝等やぶる

平治の乱（待賢門の戰）

りき。おのれが思ふことの行はれざるを、はなはだ、不平に思ひゐたりければ、義朝をいざなひ、清盛の不在中に、むほんをおこしたり。清盛は、これを聞きて、いそぎ歸り、その子、重盛などとともに、討ちて、大いに、これをや

平治の乱

平氏大いに榮えて源氏まったく衰ふ

清盛のわがまま

ぶれり。かくて、信頼は斬られ、義朝は、尾張にのがれて、殺され、義朝の子頼朝も、伊豆に流されたり。この時、平治元年なりしかば、これを平治の乱といふ。

源氏は、これより、大いに、衰へしが、清盛は、この二度の大功により、しきりに、官位を進められて、つひに、太政大臣に上れり。また、その子弟、一族は、みな、高き官位に進み、一門の領地は三十餘國にわたりて、「平氏にあらざるものは人にあらず。」とさへ、いはれ、世に、はばかるものなく、ふるまひたり。されば、そのほしいままなるをにくむもの、あひはかりて、これを

清盛おのれを亡さんとするものを罪す重盛父をいさむ

清盛後白河法皇をおしこめたてまつる

源頼政以仁王

國國の源氏ならびおこる

亡さんとせしこともありしが、かへって、清盛のために罪せられたり。これより、清盛のわがままは、ますます、はなはだしくなれり。されど、なほ、重盛の、世にありし間は、そのいさめによりて、思ひとどまることもありしが、その死後、つひに、後白河法皇をおしこめたてまつり、法皇に親しき人人の官職をうばひたり。ここにおいて、かねて、平氏にうらみをいだきたりし源頼政は、まづ、法皇の御子以仁王をいただきて、兵をおこしし、これは、たちまち、やぶれたり。されど、これより、國國の源氏は、王の命に從ひて、

ならびおこり、その後、わづかに、六年にして、つひに、平氏を亡すにいたれり。

第十七　源頼朝

源頼朝おこる

源頼朝は、さきに、流されて伊豆にありしが、以仁王の命を受けて、まづ、兵をおこせり。東國には、もとより、心を源氏によするもの多かりしかば、頼朝は、まもなく、ことごとく、東國を従へたり。この時、國國におこりし多くの源氏の中にも、頼朝の従弟義仲は、信濃におこりて、北國を従へ、弟義經は陸奥より來

東國頼朝に従ふ

源義仲

源義經

平氏勢を失ふ

平宗盛安德天皇をいただきてのがる

源頼朝

りて、頼朝を助けたり。かく、源氏の勢つよくして、これを討たんとせしも病死せしかば、平氏は、ますます、勢を失へり。さて、平氏の軍は、しばしば、やぶれて歸り、その後、清盛の子宗盛は、安德天皇を

都に、せまるにおよび、清盛の子宗盛は、安德天皇をいただきて、一門とともに、西の方にのがれ、義仲は、

義仲京都に入る

ただちに、京都に入れり。かくて、京都には、主なくなりたれば、後白河法皇は後鳥羽天皇を立てたまひき。これより、義仲、功にほこりて、ほしいままなる行多くなりしかば、

頼朝義仲を亡す

頼朝は、弟範頼、義経をつかはして、これを討ち亡したり。

一谷の戰
屋島の戰
壇浦の戰

その間に、一たん、九州までのがれたりし平氏は、また、都近くへ攻めよせしかば、頼朝は、義経等に命じて、これを討たしめたり。義経、すなはち、摂津の一谷を攻めて、平氏を追ひ落し、進みて、これを讃岐の屋島にやぶり、つひに、長門の壇浦に追ひつめたり。さ

安德天皇海に入りたまふ

れば、平氏の人人、今は、のがるるに所なく、清盛の妻は、安德天皇を抱きたてまつりて、海に入り、一門の人人、みな、あるひは討死し、あるひは捕へられて、平氏、まったく、亡びたり。

平氏亡ぶ

義経死す

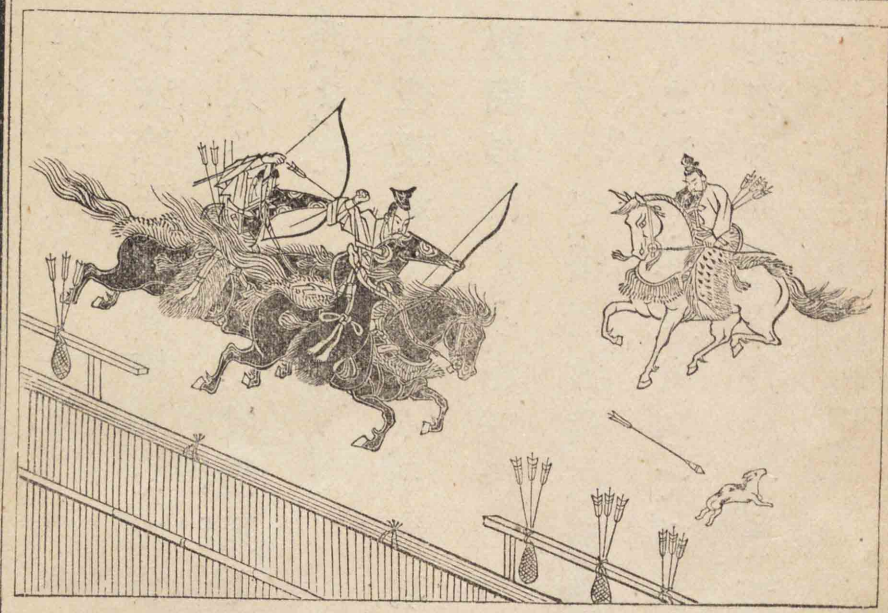
義経は、かくの如く、その功多かりしかども、かへって、頼朝のにくみを受け、つひに、陸奥にのがれて死せり。

藤原泰衡亡ぶ

ついで、頼朝は、藤原清衡の曾孫泰衡が、義経をかくまひし罪をせめて、これを亡しき。ここにおいて、奥羽より九州のはてまで、もはや、頼朝に敵するものなきにいたれり。

日本全國頼朝に從ふ

鎌倉幕府



犬追物

これよりさき、頼朝は、鎌倉に幕府の基を開きしが、ついで、あらかじめ、謀反をふせぐを名として、朝廷にこひ、手下の武士を、あまねく、天下に配布したり。ことに、頼朝は、質素をすすめ、武藝をはげまし、遊戯にも流鏑馬、犬

追物の如き勇ましきものをえらびたれば、平氏の如く柔弱に流れず、鎌倉の勢、ますます、盛になれり。

征夷大將軍

かくて、つひに、頼朝、征夷大將軍となりてより、天下の政治は、いつしか、幕府の手に落ちたり。かくの如くにして、これより明治の前まで、およそ、七百年の間、つづきたる武家政治は、はじまりたり。

武家政治

第十八　承久の乱

頼朝の妻政子北條時政

頼朝の大事業を成しとげたるについては、その妻政子の父北條時政、これを助けて功多かりき。それ

より、北條氏は、代代、執權となりて、政治にあづかり、その勢、はなはだ、強くなれり。しかるに、頼朝は、義經をはじめとして、一族功臣を、多く、失ひたれば、源氏の勢、おのづから、弱くなり、その子頼家を經て、實朝にいたり、頼朝の血筋、つひに、絶えたり。されば、時政の子義時は、政子とはかり、わづかに、二歳の藤原頼經を、京都より迎へて、鎌倉の主といただけり。これより、幕府の實權、みな、北條氏にうつれり。

頼朝の血筋絶ゆ

幕府の實權北條氏にうつる

この時、朝廷には、賢明なる後鳥羽上皇ましまし。上皇は、かねて、幕府のわがままなる行を、にくみたまひ、をりもあらば、武家政治を廢して、もとの如く、朝廷の御政治にかへさんと、おぼしめしき。されば、よりよりに、武士を召し集めて、時の來るをまちたまへり。そのうちに、實朝死して、源氏の血筋絶えたれども、義時は、政治を朝廷にかへしたてまつらざるのみならず、そのわがままなる行、ますます、重りき。されば、上皇は、つひに、仲恭天皇の承久三年に、義時の罪をならし、鎌倉を亡さんとて、大いに、國國の兵を集めたまひき。義時は、これを聞きて、子の泰時、弟の時房等をして、大兵をひきゐて、京都に攻め上

後鳥羽上皇

上皇鎌倉を亡さんとて兵を集めたまふ

義時京都を攻めしむ

三上皇遠國にうつされたまふ

らしめたり。この時、官軍はこれを美濃國にふせぎたるに、たちまち、うちまけ、宇治、勢多の守も、また、やぶれたり。されば、泰時等は、京都に入りて、それぞれ、はかりごとにあづかりたるものを罪し、つひに、義時の意を受けて、後鳥羽上皇を隠岐に、土御門上皇を土佐に、順徳上皇を佐渡にうつしたてまつれり。

承久の乱

かくて、仲恭天皇も御位を去りたまひ、後堀河天皇立ちたまへり。これを承久の乱といふ。これより後、北條氏の一族、かはるがはる、京都六波羅の役所にありて、畿内、西國の政治を行ふこととなれり。

六波羅

北條泰時

北條時頼

北條時宗

元

第十九　元寇

北條氏は、かく、道ならぬ行多かりしかども、また、泰時、時頼の如き、ふかく、心を政治に用ふるもの出でて、天下は、一時、しづかなりき。時頼は泰時の孫なり。時頼の子時宗は、武勇すぐれたる人にて、亀山天皇の御代に執權となれり。この頃、支那に元といふ強き國ありて、しきりに、多くの國國を攻め取り、遠く、ヨーロッパにまで及びしが、つひに、わが國をも、從はしめんとおびやかせり。されど、時宗は、すこしも、こ

弘安の役

元寇

れを恐れず、その使者を退けたれば、勝ちほこりたる元は、後宇多天皇の弘安四年に、十餘萬の大軍をもつて、わが九州に攻めよせたり。ここにおいて、亀山上皇は、大いに、こ

亀山天皇身をもつて國難にかはらんとしたまふ

元兵大にやぶる

元またわが國をうかがはず

れをうれへ、身をもつて、國難にかはらんことを祈りたまひ、また、時宗は、大いに、兵をはげましてこれをふせがしめたり。をりしも、大風、にはかに、おこりて、元の船は、木葉の如く、ふきちらされ、溺れ死ぬるもの、はなはだ、多かりき。また、その殘りしものどもも、多く、わが兵のために殺されて、歸るを得たるものは、はなはだ、わづかなりき。これより後、元は、また、わが國をうかがふことなかりき。

第二十　北條氏亡ぶ

後醍醐天皇

北條高時

天皇鎌倉を亡さんとしたまふ

高時天皇を隱岐にうつし光嚴天皇を立てたてまつる

後宇多天皇の御子、御位に卽きたまひて、後醍醐天皇と申す。天皇は、英明の御方にましまして、つねに、鎌倉幕府を廢せんとおぼしめしき。この頃、鎌倉には北條高時執權たりしが、その性愚にして、おごりをきはめ、政治もよからざりしかば、人人の心も、しだいに、北條氏をはなれたり。されば、天皇は、今こそとおぼしめし、武士を集めたまひしが、ことなかばにて、もれたり。幕府は、大いに、驚き、大軍をさしむけて、天皇のこもりたまへる笠置山を攻め、承久の例にならひて、天皇を隱岐にうつし、光嚴天皇を御位

楠木正成

護良親王

天皇隱岐を出でたまふ

新田義貞足利尊氏官軍となる

に卽けたてまつりき。はかりごとにあづかりし人人は、あるひは殺され、あるひは流されたり。

この時、河内の人楠木正成は、天皇の仰をうけたまはり、赤坂城、または、千早城にこもりて、敵をささへ、また、御子護良親王は、逃れて、吉野に入り、兵をおこしたまへり。かかるほどに、人人これにはげまされて、勤王の兵、所所に、おこりき。

天皇これを聞きたまひ、ひそかに、隱岐を逃れ出でて、伯耆の人名和長年によりたまへり。幕府の臣、新田義貞、足利尊氏等も、また、官軍となれり。かくて、尊

尊氏京都を取りかへす

義貞鎌倉を攻め落す

北條氏亡び鎌倉幕府廢し天皇京都に歸りたまふ

氏は、勤王の人人とともに、六波羅を攻めて、これを取り、義貞は、鎌倉に攻め入りしかば、高時以下、みな、自殺せり。ここにおいて、北條氏亡び、鎌倉幕府は、百四十餘年にして絶え、天皇、京都に歸りたまへり。

小學日本歷史　一　終

附錄

御歷代表（一）

（何年前とは明治三十七年よりかぞへたるなり）

天皇	在位年間	摘要
神武	一—七六	橿原宮に卽位したまふ。
綏靖	八〇—一一二	
安寧	一一二—一五〇	
懿德	一五一—一八四	
孝昭	一八六—二六八	
孝安	二六九—三七〇	
孝靈	三七一—四四六	
孝元	四四七—五〇三	

天皇	在位年間	摘要
開化	五〇三—五六三	
崇神	五六四—六三一	四道將軍をつかはしたまふ。
垂仁	六三二—七三〇	
景行	七三一—七九〇	日本武尊熊襲と蝦夷とを平げたまふ。
成務	七九一—八五〇	
仲哀	八五二—八六〇（八六〇—九二九 神功皇后攝政）	神功皇后三韓を從へたまふ。
應神	九三〇—九七〇	王仁來りて書物を上る。阿知使主來る。
仁德	九七三—一〇五九	三年の間貢をゆるしたまふ。

履中	一〇六〇—一〇六五	
反正	一〇六六—一〇七一	
允恭	一〇七二—一一一三	
安康	一一一三—一一一六	
雄略	一一一六—一一三九	養蚕織物などの業をすすめたまふ。
清寧	一一三九—一一四四	
顯宗	一一四五—一一四七	
仁賢	一一四八—一一五八	
武烈	一一五八—一一六六	
繼體	一一六七—一一九一	
安閑	一一九一—一一九五	
宣化	一一九五—一一九九	
欽明	一一九九—一二三一	十三年百濟王佛像を奉る。(千三百五十二年前)
敏達	一二三二—一二四五	
用明	一二四五—一二四七	二年蘇我馬子物部守屋を殺す。(千三百十七年前)
崇峻	一二四七—一二五二	
推古	一二五二—一二八八	十五年小野妹子を支那につかはす。(千二百九十七年前)
舒明	一二八九—一三〇一	
皇極	一三〇二—一三〇五	四年蘇我入鹿殺さる。(千二百五十九年前)
孝德	一三〇五—一三一四	大化の改新。(千二百五十九年前)
齊明	一三一五—一三三一	四年阿倍比羅夫蝦夷を討つ(千二百四十六年前)
天智	一三三一—一三三二	八年藤原鎌足死す。(千二百三十五年前)
弘文	一三三二—一三三二	
天武	一三三三—一三四六	

持統	一三四六—一三五七	
文武	一三五七—一三六七	大寶二年律令を發布す。(千二百二年前)
元明	一三六七—一三七五	和銅三年奈良にうつりたまふ。(千百九十四年前)
元正	一三七五—一三八四	
聖武	一三八四—一四〇九	天平十五年東大寺の大佛を作る。(千百六十一年前)
孝謙	一四〇九—一四一八	
淳仁	一四一八—一四二四	
稱德	一四二四—一四三〇	神護景雲三年和氣清麻呂宇佐八幡の神教をうく。(千百三十五年前)
光仁	一四三〇—一四四一	
桓武	一四四一—一四六六	延暦十三年都を平安京にうつしたまふ。(千百十年前)
平城	一四六六—一四六九	
嵯峨	一四六九—一四八三	
淳和	一四八三—一四九三	
仁明	一四九三—一五一〇	
文德	一五一〇—一五一八	
清和	一五一八—一五三六	天安二年藤原良房攝政となる。(千四十六年前)
陽成	一五三六—一五四四	
光孝	一五四四—一五四七	
宇多	一五四七—一五五七	仁和三年藤原基經關白の詔をうく。(千十七年前)
醍醐	一五五七—一五九〇	延喜元年菅原道眞太宰府にうつさる。(千三年前)
朱雀	一五九〇—一六〇六	天慶三年平將門殺さる。(九百六十四年前) 同四年藤原純友殺さる。(九百六十三年前)
村上	一六〇六—一六二七	
冷泉	一六二七—一六二九	
圓融	一六二九—一六四四	

花山	一六四四—一六四六	
一條	一六四六—一六七一	
三條	一六七一—一六七六	
後一條	一六七六—一六九六	萬壽四年藤原道長死す。(八百七十七年前)
後朱雀	一六九六—一七〇五	
後冷泉	一七〇五—一七二八	康平五年安倍貞任殺さる。(八百四十二年前)
後三條	一七二八—一七三二	
白河	一七三二—一七四六	
堀河	一七四六—一七六七	寛治元年源義家奥羽の乱を平く。(八百十七年前)
鳥羽	一七六七—一七八三	
崇德	一七八三—一八〇一	
近衛	一八〇一—一八一五	
後白河	一八一五—一八一八	保元元年保元の乱。(七百四十八年前)
二條	一八一八—一八二五	平治元年平治の乱。(七百四十五年前)
六條	一八二五—一八二八	仁安二年清盛太政大臣となる。(七百三十七年前)
高倉	一八二八—一八四〇	
安德	一八四〇—一八四五	治承四年源頼政兵を起す。(七百二十四年前)
後鳥羽	一八四三—一八五八	文治元年(安德天皇寿永四年)平氏亡ぶ。(七百十九年前) 建久三年頼朝征夷大將軍となる。(七百十二年前)
土御門	一八五八—一八七〇	
順德	一八七〇—一八八一	承久元年源實朝殺さる。(六百八十五年前)
仲恭	一八八一—一八八一	承久三年承久の乱。(六百八十三年前)
後堀河	一八八一—一八九二	
四條	一八九二—一九〇二	
後嵯峨	一九〇二—一九〇六	

後深草	一九〇六—一九一九	
亀山	一九一九—一九三四	
後宇多	一九三四—一九四七	弘安四年元九州ををかす。(六百二十三年前)
伏見	一九四七—一九五八	
後伏見	一九五八—一九六一	
後二條	一九六一—一九六八	
花園	一九六八—一九七八	
後醍醐	一九七八—一九九九	元弘三年北條氏亡ぶ。(五百七十一年前)
光嚴	一九九一—一九九三	

明治三十六年十月三日印刷
明治三十六年十月六日發行
明治三十八年十一月六日飜刻印刷
明治三十八年十一月十一日飜刻發行

小學日本歷史一
定價金七錢五厘

著作兼發行者　文部省
飜刻發行兼印刷者　鈴木常松　大阪市南區鹽町通三丁目八十番屋敷
印刷所　修文館印刷工場　大阪市西區阿波坐二番丁一番地
發行所　修文館　大阪市南區鹽町通三丁目八十番屋敷

著作權所有

明治三十八年十月卅一日
文部省檢査濟

發賣所
東京市日本橋區新右衞門町十六番地
合名會社　國定教科書共同販賣所

300. –